



絵を扱うよろこび

中宮 時男

私は父より画廊（創立昭和2年）の仕事を受け継ぎ、この道一筋に40年余になります。その間には様々なことがございました。今日は特に思い出深いお話を少し綴らせて頂きます。

〈絵画には値段があって ないようなもの…〉

皆 様もご存じかと思いますが、1990年にイトマン絵画事件が各マスコミで大きく報道されました。当時、私は大阪地方検察庁からの依頼を受け、その内の主な217点と他約800点の絵画の評価・鑑定を5日間にわたり住友倉庫で行いました。

その時私が驚いたのは、関係者の人々から「絵画には値段があって無いようなものだ」という言葉を耳にしたことでした。私は「絵には一定の値段がある」という前提に画商という仕事をしている訳ですが、実は多くの一般の方にとって絵画の値段がそのように認識されているということはちょっとした驚きだったのです。

しかし、絵画に適正価格がないという前提ですと、いくら高額で売買されたとしても立件することは出来ないのです。私は一般の方との絵画に対する前提の違いを悟った時、これは事件の大きなポイントだと思いました。

画 廊業界には1940年頃より、美術業者が美術品を売買するための“交換会”という

ものが存在します。業者は交換会で流通している価格（東京でも大阪でもほぼ同じで、10%の落差もありません）をいつもベースにして美術品に値付し、全国の画廊等に流通させていくという仕組みです。

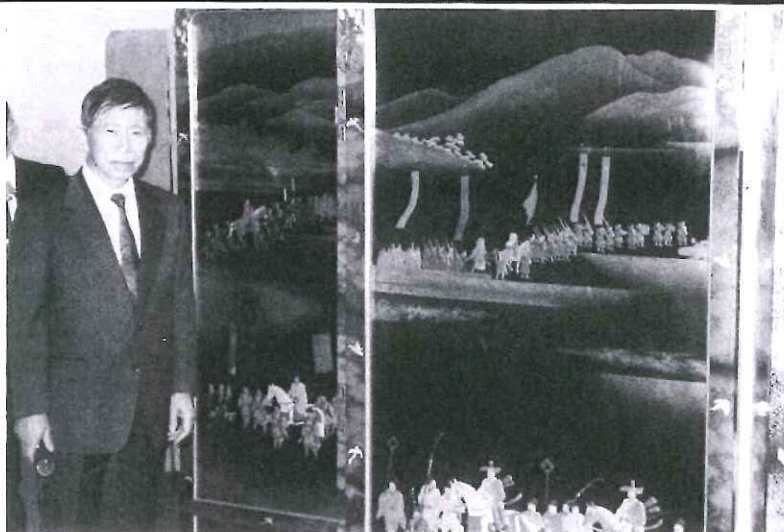
美術家を判断する基準のひとつに「美術家年鑑」という本があります。この年鑑には画家や彫刻家など、自薦他薦も含め約2万5千人の美術家の名前が掲載されています。ところが実際に市場性のある美術家、つまり交換会で作品が出品される画家というのは洋画・日本画家で約100名、そして明治以後の物故画家でも約100名ぐらいしかありません。つまり、市場性があり、安定した評価に伴う適正な値付のされる画家はせいぜい200名位しかないということです。

それ以外の約24,800名余りの美術家の作品には安定した価格というものがほぼ無いと言ってよいのです。そういった画家の作品が世の中には大多数存在しますので、「絵画は一般的に値段があってないようなもの」と言われる所以なのです。

ところがイトマン事件で売買された絵画は現存・物故も含め、評価の安定した市場性のある作家の作品ばかりでした。検察庁はこの事件で「通常一般店頭小売価格」という言葉を造語し、当時頻繁に使用していました。その適正価格よりもあまりにも法外な高額で売却し

たという理由でようやく昨年の10月31日、許永中に厳刑が下りました。

この事件によって初めて、「絵画には確かに適正な値段が存在する」というはっきりとした認識が日本に生まれました。多少は美術業界、もしくは一般の方々への美術に対する認知に役立てたのではないかと自負している次第であります。



金時絵時代行列図屏風の評価鑑定を終えて(住友倉庫にて)

〈人生は70歳から〉

島 根県の安来市に足立美術館があります。この日本有数の日本画美術館の故館長・足立全康氏は私が最も尊敬する一人です。足立氏は繊維会社を経営なさっていた方で、70歳の時、「故郷に美術館を作りたい」と私に相談に来られました。当時日本には殆ど洋画の美術館しかなく、日本画の美術館は唯一東京に山種美術館があっただけでした。関西には日本画の美術館が無かった為、「関西の山種」にされては、と私は大賛成しました。そして五年後(昭和45年)、立派な美しい庭園を備えた足立美術館が誕生しました。普通なら70歳になれば身の整理をさ

れる方が多いかも知れません。しかし、足立氏はその歳から前向きに青年のごとく意欲を燃やし、情熱を作品のコレクションや庭園に注ぎ、荘厳な美術館を創立するという大きな目標を実現させたのです。

あ る時、氏は私に「日本一が三つ出来た」と足立美術館について報告されました。一、「日本一入場料が高いこと。」二、「借景の山まで購入し、敷地が広いこと。」三、「借金が一番多いこと。」そう言われ、思わず笑ってしまいました。その三番目は自信があるからこそのお言葉だと思いました。

彼は75歳から90歳までの間、月に何度かの電



足立美術館の庭園



村上華岳の裸婦図

話があり、「何か良い作品が入っていないか。こういう作家のこんな絵を探しているのだが」と頻りに注文されました。美術館をより充実させていくことにとっても熱心でした。また足立氏が93歳の時には、「今度は世界一が出来た」と電話で話して下さいました。肺ガンにかかり記録的な高齢で手術を受けられたとのことでした。そして96歳、足立氏は最後まで人生を精一杯生き抜き、永眠されました。

横山大観・川端龍子・榊原紫峰などの多数の名画を有する足立美術館は、氏がこの世を去られた後も氏の情熱の結晶として今も生きています。足立氏も、きっと天国から名画を眺め満足しておられることでしょう。

〈名画は人の心を動かす〉

神 戸に村上華岳（明治21年～昭和14年）という日本画の大家がおりました。私はこの作家に魅せられ、彼の多くの絵を画商として扱ってきました。その崇高なる精神と厳しさ、慈愛に満ちた表現力は描かれた「六甲の山々」、「柳」、「牡丹」や「聖観音図」を通じて心の奥底に響き感性に訴えます。私が華岳の作品を取り扱い始めたのは昭和34年頃で、その頃はこちらの希望値で入手出来ましたが、その後多くの愛好家や画商の間で人気を集め、没後40年を経た昭和55年頃には高値になり、今や日本画の中で最高峰の値をつけるまでになりました。

その事はさておき、彼が生涯に描いた約1,300点の中に、一点のみ裸婦画があります。この裸婦画は、久遠の女性を追及して描かれた作品です。人間的な感覚を肯定し、いかにしてその感覚を宗教的な美にまで高めるかという問題に対して、答えを表現している素晴らしい傑作です。

華岳はこの一作をさかいに、仏画の世界へと移っていきました。華岳の作品の中でもとりわけ意味深いこの作品にまつわるこんなエピソードがあります。

東 京のある女性からの手紙にこう書いてありました。「私はある時、人生に行き詰まり、熱海で自殺することを決意しました。切符を買いに銀座に行ったのですが、松屋でふと“村上華岳展”のポスターを目にしました。何だか絵が私を呼んでいるような気がして、心惹かれて思わず展覧会場に行きました。

「そこでポスターの裸婦の作品を目の前にし、私はその絵に釘付けになってしまいました。裸婦の顔は亡くなった母の顔にも見え、また可愛がってくれた姉の顔にも見えたのです。私はまるで母や姉に自殺を止められているかの様に感じ、結局自殺をやめるに至りました。せっかくもらった大切な命を無駄にははいけないと思ったのです。その後私は一生懸命働き、自分の店を持てるようにまでなりました…。」

〈絵を購入される時は
「人生の至福のとき」〉

絵 なんかなくとも生活にはなんの支障もない。画廊を経営する私がこういうのも変なのですが、私は社員によくこう言います。言い換えると、「絵画という究極の贅沢品は無くとも生きて行けるが、あればなお一層人生を素晴らしくする」という意味なのですが。

お客様の一人で、ある実業家の方からは毎日と言ってよいほどお電話を頂き、そして超人的に多忙な合間をぬって私の画廊に足を運んで下さいます。本当に絵を見たい方、欲しい方は、忙しい中でも絵画に対する意欲を燃やし、たくさんのお絵画を見て、実際にご自分のものにされていきます。

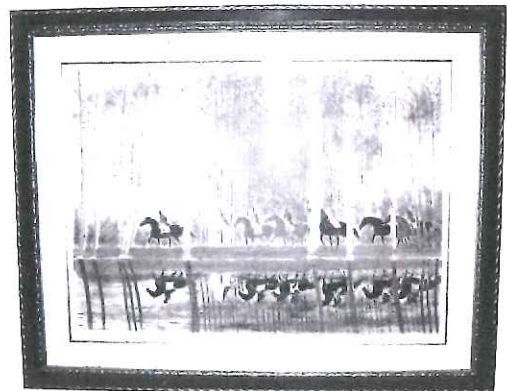
絵を購入なさる方という、きつとのんびりとしていて、静かなお客様が多いのではと想像される方も多いかもしれませんが、そういうお客様もいらっしゃいますが、実際は不思議なことに、仕事熱心で多忙な方ほど、絵画の収集欲も盛んな傾向があります。時間を一切無駄にせず、まさに人生を精一杯エネルギーに謳歌しているという印象の方が多いのです。その様な方とお話しておりますと、まさに絵画を購入なさる瞬間というのはお客様にとって「至福のとき」なんだと最近ことに思う様になりました。

ま ず絵画など美術品を手に入れたいと思うお客様には、芸術に興味を持たれるという文化的なセンス、また作品を飾る雰囲気的空間をお持ちで、家族の理解があり、経済的な余裕をお持ちなのだと思います。また健康、心の余裕も大切なことです。お客様は、より日常を豊かにするために美術品を探しに画廊にいらっ

しゃいます。おそらくすべての要素のうち一つでも欠けたら、高価な美術品を実際にお買われる気持ちには決してならないのだらうと思います。

様々な意味で真のゆとりをお持ちのお客様が、美術品という究極の心の贅沢品を手に入れられるのです。美術品を持つということはお客様にとって、人生の豊かさのシンボルなのかも知れません。

私は、人と美術品の出会いの場である画廊でお客様の“至福のとき”に立会える画商という仕事を幸いに思っております。これからもますます良い絵を探し求めて行きます。



今月のギャラリー

倶楽部50周年記念を契機に別館の新築、食堂等のリフレッシュに相俟って、食堂ホール入り口正面に素晴らしい絵が展示されている。毎月新しい絵が展示され、来場者を和ませている。